

「仏教」から臓器移植を考える(上)



私は「生かされている」という認識から、
他者救済の行動へ

横山 紘一

よこやま・こういつ

1940年、福岡県生まれ。70年、東京大学大学院印度哲学科修了。80年、第15回日本宗教学会賞受賞。現在、立教大学教授。著書に『唯識の哲学』、『唯識とは何か』など。

仏教から脳死そして臓器移植をどのように考えるか。これは到底結論できない問題である。なぜなら一概に仏教といってもさまざまな仏教思想があるからである。まずはインド仏教、それも原始仏教、部派仏教（小乗仏教）、大乘仏教などに分れるし、さらには東南アジア仏教、西域仏教、中国仏教、朝鮮仏教そして日本仏教と分岐してきたし、またそれぞれにおいて多種多様の教理が作られたからである。

だからといって仏教界はこの問題を視野の外に置くことは時代の要請として許されない。

そこで、結論を出す一つの方法がある。それは、脳死・臓器移植を論じようとする仏教者自身が理解する「仏教」を論理的思索の根底に据え、それにその人の、いわば心の深淵から湧き出てくる「無前提の意志・願い」を加味することによって何らかの結論を導き出すという方法である。

したがって、この小論を展開するにあたり、仏教とは、あくまで私個人が理解する「仏教」であり、しかも膨大な仏教思想のなかから私自身のいわば「無前提の意志」にしたがって選びとられた「仏教」であるということをまずことわっておきたい。

私は、物事を、特に重要な問題を考えるときには、常に次のような思维方法をとることになっている。

sein (なにか) → sollen (いかに生きるか)

↑

wollen (なにを願うのか)

物事への思索は、その物事が「なにか」というseinのありようを見究めることから始まるし、または始めなければならぬ。その認識の上に「いかに生きるか」というsollenが導き出される。しかしこの両者の間に、その結論を出す当人が「何を願うのか」というwollenが絡んで、最終的にsollenが結論づけられる、というのが私なりの思考方法である。この思考方法にしたがって以下臓器移植を考えてみたい。

(一)「仏教」は「私」をなにものであると捉えるのか。

結論から言うと、「私は無我であり空である」と言うことができる。これについて少し説明を加えてみよう。

私は縁あって昨年から自分の住んでいるマンションの横で家庭菜園をはじめ、いろいろの野菜を作っている。仕事の合間に大地を耕し、種をまき、そして実りを収穫する楽しみはまた格別である。

この小さな楽しみを通して私は大きなことを学んだ。それは「いのちの不思議さ」「いのちの素晴らしさ」「いのちの尊さ」、そしてなによりも「いのちは生かされてあるのだ」という事実である。

キュウリ、ナス、トマトなど代表的な家庭野菜のほとんどのに挑戦してみた。最初の年で土地が肥えていたのであろうか、種をまくと、すぐに芽をだし、もりもりと成長して多くの実を結び、小さな種子の中に潜む生命力の素晴らしさにいつも驚かされている。

でもその生命力が開花するためには、また数多くの他の力、助けも必要であることも学んでいる。種子を机の上に置いても芽を出さない。それを土の中にまき、水や肥料

を施さねばならない。そしてなにより大きな力となるのは、あの「太陽」の存在である。

はじめになぜこのような話を出したかというと、野菜と同じように人間も自分以外の数え切れないほどの助けによって「**生かされている**」のだという事実を指摘したかったからである。以前にNHKが放映した「人体―驚異の小宇宙」という番組のなかで私にとって感動的なシーンがいくつかあった。受精卵にだんだんと器官らしいものができ、一ヶ月ごろのある瞬間に、それはそれは小さな幼い心臓が突然にコトンと音を立てて脈動を開始したのである。その時私は「人間とは、いのちとは何者かによって生かされているのだ」という事実をはじめて知らされた。心臓が動き始める瞬間だけではない。受精卵が子宮に移動する間、輸卵管の纖毛の動きがなかったら、今のこの私は存在していないのである。

生まれ出てからも、言うに及ばず、もう数え切れない程のさまざまな助けによって今の私にまで成長してきた。また今一瞬にしてもそうである。大地があり、太陽があり、星々があり、そして少し大袈裟かもしれないが、あのビッグバンで膨張しつつづけている宇宙の果てがあるからこそ、今のこの私が生出し得るのである。

本当に私は「**生かされてある**」のである。

ところで、自分以外の他者の助け、これを仏教では「縁」といい、そのような縁によって生かされていることを「縁起」という。縁によって自分が生起している、存在しているという意味である。そこで仏教は、「**縁起のゆえに無我であり空である**」と実存のありようを簡単に定義する。

無我とは、「われ」「わがもの」というものは存在しない、ということであり、空とは、言葉で語れない、あるがままにあるものをあえて言語化して空というのである。この無我・空こそが、仏教の根本思想であり、すべての問題は、これを根底として考えていくべきであると私は考える。したがって、無我とはわれ・わがものというものがないことであるから、臓器移植に関しても「私の臓器」「他人の臓器」というものは存在しないのである。仏教から臓器移植を考える場合、まず、この認識から出発していくべきである。

とはいっても無我・空といった考えは、長い修行によって存在の真理・真相を大悟した聖者・釈尊の悟り世界から言えることであって、私たち強いエゴ心をもつ凡夫はなかなかそうはいかないところに大きな問題がある。

(二)「仏教」は「私のエゴ心」をどう考えるのか

まさに人間は自己中心的なエゴ心の渦巻く泥海のなかに生きていると言っても過言ではない。だから臓器移

植の問題も複雑かつ解決困難になるのである。

臓器移植に関与する人々を次のようにグループ分けすることができる。

- 1) 受容者——「私」が受ける臓器移植
- 2) 受容者の家族——「私」の息子が受ける臓器移植
- 3) 提供者——「私」の臓器によって行われる臓器移植
- 4) 提供者の家族——「私」の息子の臓器によって成立する臓器移植
- 5) 医師——「私」が執刀する臓器移植
- 6) 第三者——第三者としての「私」にとっての臓器移植

いずれの領域においても常に「私」というものが存在し、それにそれぞれの立場の相違に基づくエゴ心が絡んでくる。とくに臓器移植あるいは脳死という問題に関しては、「生」と「死」という人間にとっての根源的状況が関わってくるので、そこにはより強烈な「エゴ心」が介入してくることになる。

このうちいま、受容者のエゴ心、すなわち臓器をもらって生きたいという欲望を取り上げてみたい。

釈尊は貪欲という煩惱を否定して「貪るなかれ」と教えた。この教えに基づいて、受容者が生きんがために他者の臓器を欲することを貪りとして否定し、臓器移植そのものに反対する論者もいる。しかし、はたしてすべてにわたって「貪るなかれ」と言い切る事ができるであろうか。

たしかに釈尊は煩惱を滅して苦なき涅槃に到ることを説いた。しかし、決して生きようとする意志・本能までも否定したのではない。釈尊は、あの法隆寺の玉虫の厨子に描かれている有名な「捨身飼虎」にみられるように、飢えた虎の親子連れの生きんとする意志に対して我が身を捨てたではないか。

私は、仏教が説く人間の二大尊厳性は「智慧」と「慈悲」とであると考え。このうち智慧とは、自己と宇宙とは空であり無我であるとみる悟りであり、慈悲とは、その悟りに基づいて生きとし生けるものを苦から救済しようと願う心である。他者を救おうと願うこと、そしてそのための実践を展開すること、これが仏教徒の為すべきすべてであると私は強く確信している。

「貪るなかれ」—たしかにこれは自分に言い聞かせてよいし、またそうすべきである。しかし現に苦しむ患者・受容者に対してその同じ言葉を当てはめるべきではない。最近私は「自己の生命」「自己の生死」と「他者の生命」「他者の生死」とは雲泥に相違するものであるとの認識に達した。その認識に立って、「私のエゴ」は否定すべきであるにしても、同じ論法で「他者のエゴ」までも否定することは大きな誤りであると言いたい。(続く)